

授業科目	言語聴覚障害診断学Ⅰ	担当教員	北風 祐子		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚士に関わるそれぞれの分野の評価、援助技術について学ぶ。				
到達目標	言語聴覚障害学について学習し、評価の方法や援助技術について確認し、実施できる。また、それらを報告し、系統立てて言語聴覚障害について考えることができる。				
テキスト・参考図書等	(教) 診断力 UP! 動画と音声で学ぶ 失語症の症状とアプローチ (参) 図解 やさしくわかる言語聴覚障害 著者名：小嶋智幸 発行所：ナツメ社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	60	実技試験、レポートで総合的に評価を行う。		
	レポート	40			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	標準失語症検査(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	2	標準失語症検査(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	3	標準失語症検査(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	4	摂食嚥下機能診断	評価と結果の解釈、問題点と援助方法		
	5	摂食嚥下機能診断	評価と結果の解釈、問題点と援助方法		
	6	摂食嚥下機能診断	評価と結果の解釈、問題点と援助方法		
	7	摂食嚥下機能診断	評価と結果の解釈、問題点と援助方法		
	8	成人系言語聴覚診断	失語症・高次脳機能障害の評価と結果の解釈、問題点と援助方法		
	9	成人系言語聴覚診断	失語症・高次脳機能障害の評価と結果の解釈、問題点と援助方法		
	10	成人系言語聴覚診断	失語症・高次脳機能障害の評価と結果の解釈、問題点と援助方法		
	11	成人系言語聴覚診断	失語症・高次脳機能障害の評価と結果の解釈、問題点と援助方法		
	12	成人系言語聴覚診断	運動障害性構音障害の評価と結果の解釈、問題点と援助方法		
	13	成人系言語聴覚診断	運動障害性構音障害の評価と結果の解釈、問題点と援助方法		
	14	小児系言語聴覚診断	小児分野の知的発達及び言語発達の評価と結果の解釈、実際の支援方法		
15	小児系言語聴覚診断	小児分野の知的発達及び言語発達の評価と結果の解釈、実際の支援方法			

授業科目	言語発達障害Ⅲ	担当教員	佐々木 勇輝		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	自閉スペクトラム症・注意欠如多動症について学ぶ。具体的な事例を基に評価・支援について考える。				
到達目標	自閉スペクトラム症・注意欠如多動症の概要・評価・支援について理解する。				
テキスト・参考図書等	(教) 標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第3版 著者名：藤田郁代 発行所：医学書院				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験・小テスト・提出物を合わせて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	15			
	提出物	5			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席せず、教科書および授業で配布された資料、授業のメモに基づき理解を深めること。授業で実施する国家試験形式問題を解けるようになること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	自閉スペクトラム症について	定義・歴史・基本的概念		
	2	自閉スペクトラム症について	診断基準(DSM-5)・言語発達等の特徴		
	3	自閉スペクトラム症について	他の障害との関係、有病率		
	4	自閉スペクトラム症について	認知特性について(心の理論・中枢性統合・実行機能)		
	5	自閉スペクトラム症について	DVD(レインマン)鑑賞		
	6	自閉スペクトラム症児の評価	記録の仕方、情報収集		
	7	自閉スペクトラム症児の評価	評価(診断検査・スクリーニング検査・関連検査)		
	8	自閉スペクトラム症に対する訓練	支援の原則、TEACCHプログラム等		
	9	自閉スペクトラム症に対する訓練	支援法		
	10	注意欠如多動症について	定義・歴史・基本的概念		
	11	注意欠如多動症について	診断基準(DSM-5)・治療法など		
	12	注意欠如多動症について	評価(ADHD-RS、Conners3等)		
	13	注意欠如多動症について	SST、ペアレントトレーニング		
	14	注意欠如多動症について	家族支援、児童福祉法、発達障害者支援法の理解		
15	自閉スペクトラム症・注意欠如多動症	国家試験問題を解く			

授業科目	言語発達障害Ⅳ	担当教員	佐々木 勇輝		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	発達障害について全般的に学び、支援の枠組みについて考える。				
到達目標	① 特異的言語発達障害および、学習障害の概要を理解する。 ② 検査の目的を学ぶ。 ③ 発達障害の支援方法を考える。				
テキスト・参考図書等	(教) 標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第3版 著者名：藤田 郁代 発行所：医学書院				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験・小テスト・提出物を合わせて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	15			
	提出物	5			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席せず、教科書および授業で配布された資料、授業のメモに基づき理解を深めること。授業で実施する国家試験形式問題を解けるようになること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	特異的言語発達障害	特異的言語発達障害とは		
	2	特異的言語発達障害	言語・コミュニケーションの特徴		
	3	特異的言語発達障害	評価と支援		
	4	限局性学習症	限局性学習症とは		
	5	限局性学習症	限局性学習症のタイプ		
	6	限局性学習症	読み書きの定型発達と必要な能力		
	7	限局性学習症	ディスレクシア		
	8	限局性学習症	算数障害		
	9	限局性学習症	評価 (STRAW-R、URAWSS II 等)		
	10	限局性学習症	支援(基本原則)		
	11	限局性学習症	支援 (ひらがな、漢字の音読・書字訓練)		
	12	限局性学習症	事例演習		
	13	検査演習	言語・構音検査について保育園で実習を行う		
	14	検査演習	言語・構音検査について保育園で実習を行う		
15	限局性学習症	国家試験問題を解く			

授業科目	言語発達障害 V	担当教員	永野 勢津子		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	脳性麻痺等の重度障害について理解する。コミュニケーションの取り方・支援方法について理解する。				
到達目標	(1) 脳性麻痺、重度重複障害の基礎知識（概念、症状、分類）について理解する (2) 言語・コミュニケーション発達支援 (3) 家族支援について学ぶ (4) 子どもの神経発達、脳画像の基礎知識を学ぶ				
テキスト・参考図書等	(教) 子育てハンドブック～脳性まひ児とともに～ 発行所：市村出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験 80%、レポート 20%		
	レポート	20			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	復習をしっかりとしてください。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	基礎知識	脳性麻痺とは、脳性麻痺の原因と発生率		
	2	基礎知識	脳性麻痺とは、脳性麻痺の原因と発生率		
	3	発達障害	脳性麻痺の分類と症状、脳性麻痺の合併症		
	4	発達障害	言語・コミュニケーション障害を阻害する要因 (1) 運動機能障害 (2) 知的障害		
	5	発達障害	言語・コミュニケーション障害を阻害する要因 (3) 聴覚障害 (4) 高次脳機能障害		
	6	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	姿勢運動障害へのアプローチ		
	7	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	言語・コミュニケーション発達障害 (1) 基本的な考え方		
	8	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	(2) 姿勢とオーラルコントロール (3) 前言語期の支援		
	9	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	(2) 姿勢とオーラルコントロール (3) 前言語期の支援		
	10	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	(4) ことばの獲得期の支援		
	11	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	(5) 拡大・代替コミュニケーションの獲得		
	12	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	(6) 話し言葉の準備段階へのアプローチ		
	13	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	(7) 話し言葉の改善		
	14	AAC	拡大代替コミュニケーション		
15	家族支援	家族支援			

授業科目	言語発達障害VI	担当教員	箭本 尚子		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	それぞれの知能検査の目的を学び、検査方法を実践から学び、結果を解釈する。				
到達目標	①各種検査の目的を知り、子どもの発達状況に合わせた検査を選択することができる。 ②検査方法を習得し、検査結果をまとめることができる。				
テキスト・参考図書等	(参) 言語聴覚士のための臨床実習(小児編) 著者名: 深浦順一 発行所: 建帛社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70	定期試験と提出物を合わせて評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	30			
その他	0				
履修上の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・欠席せず、復習をすること。 ・演習時は私語を慎み、周囲の人に迷惑をかけないようにすること。 				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	知能検査	評価の目的と方法		
	2	知能検査	DN-CAS 認知評価システム(目的、概要、実施手順)		
	3	知能検査	日本版 KABC-II(目的、概要、実施手順)		
	4	知能検査	日本版 KABC-II(演習)		
	5	知能検査	日本版 KABC-II(評価、解釈)		
	6	知能検査	WISC-V(目的、概要、実施手順)		
	7	知能検査	WISC-V(演習①)		
	8	知能検査	WISC-V(演習②)		
	9	知能検査	WISC-V(評価、解釈)		
	10	知能検査	WPPSI-III(目的、概要、実施手順)		
	11	発達検査	新版 K 式発達検査(目的、概要、実施手順)		
	12	発達検査	新版 K 式発達検査(演習)		
	13	発達検査	新版 K 式発達検査(評価、解釈)		
	14	事例	事例検討①		
15	事例	事例検討②			

授業科目	構音障害 II		担当教員	佐々木 勇輝	
対象年次・学期	2年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	20回	時間数 0時間
授業目的	機能的構音障害・器質性構音障害について理解する。				
到達目標	各構音障害の定義から基礎的知識、臨床への応用までを学ぶ。 構音障害の基礎や検査方法、実際の教材の研究や指導のカリキュラムの立て方などを学ぶ。				
テキスト・参考図書等	(教)：言語聴覚士のための臨床歯科医学 編：道健一 発行所：医歯薬出版 構音障害の臨床－基礎知識と実践マニュアルー 改訂第2版 著者名：阿部雅子 発行所：金原出版 (参)：言語聴覚士テキスト				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験・小テストにより評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	20			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席せず、教科書および授業で配布された資料、授業のメモに基づき理解を深めること。 授業で実施する国家試験形式問題を解けるようになること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	器質性構音障害について	発声発語器官の発生、器質性構音障害とは		
	2	器質性構音障害について	口唇口蓋裂、滲出性中耳炎		
	3	器質性構音障害について	口唇口蓋裂、滲出性中耳炎		
	4	器質性構音障害について	先天性鼻咽腔閉鎖不全症		
	5	器質性構音障害について	簡易検査・機器を用いた検査		
	6	器質性構音障害について	医学的アプローチ		
	7	器質性構音障害について	言語聴覚士による訓練		
	8	器質性構音障害について	口腔疾患による構音障害		
	9	器質性構音障害について	口腔疾患による構音障害		
	10	器質性構音障害について	チームアプローチについて		
	11	機能的構音障害について	機能的構音障害について		
	12	機能的構音障害について	発声・構音の仕組み、構音の発達		
	13	機能的構音障害について	構音の誤りについて		
	14	機能的構音障害について	機能的構音障害の評価		
	15	機能的構音障害について	新版構音検査の実施		
	16	機能的構音障害について	新版構音検査の実施		
	17	機能的構音障害について	新版構音検査の実施		
	18	機能的構音障害について	機能的構音障害の訓練		
	19	機能的構音障害について	機能的構音障害の訓練		
20	機能的構音障害について	機能的構音障害の訓練			

授業科目	構音障害演習	担当教員	阿部 由美		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	運動障害性構音障害の対象者に対して、基本的検査・評価技能を実技的に学ぶ。				
到達目標	運動障害性構音障害の対象者に対して、標準ディサスリア検査の評価手技を習得する。				
テキスト・参考図書等	適宜、資料を配布する。				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90	定期試験 90%(筆記 6割・実技 4割)、小テスト 10%により評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	10			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	忘れ物なく、欠席なく授業に臨むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	運動障害性構音障害の評価	評価とは、検査される側になってみよう		
	2	検査	(スクリーニング含む検査)、SLTA-ST (1)		
	3	検査	SLTA-ST (1)		
	4	検査	SLTA-ST (1)		
	5	検査	AMSD		
	6	検査	AMSD		
	7	検査	AMSD		
	8	検査	AMSD		
	9	検査	AMSD		
	10	訓練、報告書	構音障害の訓練 (様々な訓練)		
	11	訓練、報告書	様々な訓練法の実際、報告書の書き方 (問題点・目標の見つけ方)		
	12	訓練、報告書	様々な訓練法の実際、報告書の書き方 (問題点・目標の見つけ方)		
	13	訓練、報告書	様々な訓練法の実際、報告書の書き方 (問題点・目標の見つけ方)		
	14	ICF に基づいた評価結果の解釈	言語聴療法の進め方 (様々な訓練法の実際)		
15	ICF に基づいた評価結果の解釈	言語聴療法の進め方 (様々な訓練法の実際)			

授業科目	高次脳機能障害 II	担当教員	藪 貴代美		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	様々な高次脳機能障害に対する検査の種類・特徴・実施方法について学ぶ。				
到達目標	対象者に適切な検査を選択・実施し、検査結果ならびに症状の観察から問題点を抽出できる。				
テキスト・参考図書等	(教) 高次脳機能障害ポケットマニュアル 著者名：原寛美 発行所：医歯薬出版 (教) 高次脳機能障害学 著者名：藤田郁代 発行所：医学書院 (参) 高次脳機能障害学 著者名：石合純夫 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験、提出物を総合的に評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	20			
その他	0				
履修上の留意事項	検査は自分たちで実際に体験すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	高次脳機能障害評価	評価における注意点、何を評価するのか、どのような検査を選択するのかを外観する		
	2	知能検査	成人分野で使われる知能検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	3	記憶検査	記憶検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	4	記憶検査	記憶検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	5	記憶検査	記憶検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	6	失認検査	失認に関する検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	7	失行検査	失行に関する検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	8	遂行機能検査	遂行機能検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	9	注意機能検査	注意機能検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	10	前頭葉検査	前頭葉に関する検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	11	無視検査	半側空間無視と半盲の検査の特徴、実施方法について学ぶ		
	12	認知症検査	認知症検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	13	認知症検査	認知症検査の種類と特徴、実施方法について学ぶ		
	14	事例検討	いろいろな事例を通し、検査の選択、症状の把握の練習と評価報告書作成の練習を行う		
15	事例検討	いろいろな事例を通し、検査の選択、症状の把握の練習と評価報告書作成の練習を行う			

授業科目	高次脳機能障害Ⅲ		担当教員	藪 貴代美	
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	数ある高次脳機能障害検査の中から対象者に適切な検査を実施し、結果の統合解釈、問題点の抽出を行い、リハビリ方法について学ぶ				
到達目標	目標設定を行い、リハビリテーションプログラムを作成し訓練ができるようになる。報告書が作成できるようになる。				
テキスト・参考図書等	(教) 高次脳機能障害ポケットマニュアル 著者名：原寛美 発行所：医歯薬出版 (教) 高次脳機能障害学 著者名：藤田郁代 発行所：医学書院 (参) 高次脳機能障害学 著者名：石合純夫 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験、提出物を総合的に評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	20			
その他	0				
履修上の留意事項	検査は自分たちで実際に体験し、慣れておくこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	高次脳機能障害の復習	用語と検査の復習		
	2	知能検査	成人分野の知能検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	3	記憶検査	記憶検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	4	記憶検査	記憶検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	5	注意機能検査	注意機能検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	6	遂行機能検査	遂行機能検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	7	無視検査	半側空間無視・半盲の検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	8	失認検査	失認検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	9	失行検査	失行検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	10	認知症検査	認知症検査結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案を学ぶ。		
	11	事例検討	様々な事例を通し、検査の選択、検査実施、評価報告書作成の練習を行う。		
	12	事例検討	様々な事例を通し、検査の選択、検査実施、評価報告書作成の練習を行う。		
	13	事例検討	様々な事例を通し、検査の選択、検査実施、評価報告書作成の練習を行う。		
	14	事例検討	様々な事例を通し、検査の選択、検査実施、評価報告書作成の練習を行う。		
15	事例検討	様々な事例を通し、検査の選択、検査実施、評価報告書作成の練習を行う。			

授業科目	高次脳機能障害演習Ⅰ	担当教員	北風 祐子		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	評価実習では実際の対象児・者に対して言語聴覚療法の評価や検査を実施し、結果の考察や分析を行い、指導・援助プログラムの立案を行う。そのために必要な種々の評価の目的や実施手順を学ぶ。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・種々の掘り下げ検査の目的を理解し、実施方法について習得する。 ・評価結果に基づき問題点、訓練立案などの報告書作成を試みる。 				
テキスト・参考図書等	教科書は使用しない。適宜、資料を配布。 参考図書：言語療法マニュアル 改訂3版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90	定期試験・提出物を合わせて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	10			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席、忘れ物せず、確実に復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	言語聴覚療法とは	評価される側になる		
	2	掘り下げ検査	・HDS-R ・MMSE ・Kohs 立方体組み合わせテスト ・ベントンの視覚記憶検査 ・レーブン色彩マトリックス検査 ・トークンテスト		
	3	掘り下げ検査	・HDS-R ・MMSE ・Kohs 立方体組み合わせテスト ・ベントンの視覚記憶検査 ・レーブン色彩マトリックス検査 ・トークンテスト		
	4	掘り下げ検査	・HDS-R ・MMSE ・Kohs 立方体組み合わせテスト ・ベントンの視覚記憶検査 ・レーブン色彩マトリックス検査 ・トークンテスト		
	5	掘り下げ検査	・HDS-R ・MMSE ・Kohs 立方体組み合わせテスト ・ベントンの視覚記憶検査 ・レーブン色彩マトリックス検査 ・トークンテスト		
	6	掘り下げ検査	・HDS-R ・MMSE ・Kohs 立方体組み合わせテスト ・ベントンの視覚記憶検査 ・レーブン色彩マトリックス検査 ・トークンテスト		
	7	掘り下げ検査	・HDS-R ・MMSE ・Kohs 立方体組み合わせテスト ・ベントンの視覚記憶検査 ・レーブン色彩マトリックス検査 ・トークンテスト		
	8	症例検討	・ICFに基づき問題点を考える		
	9	症例検討	・ICFに基づき問題点を考える ・プログラム立案		
	10	症例検討	・ICFに基づき目標を考える ・プログラム立案		
	11	訓練	・ICFに基づき目標を考える ・プログラム立案		
	12	訓練	訓練の実際		
	13	訓練	訓練の実際		
	14	報告書	きれいな日本語で正しい文章を書く		
15	報告書	きれいな日本語で正しい文章を書く			

授業科目	歯科口腔外科学(形成外科学を含む)		担当教員	三古谷 忠	
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	20回	時間数 40時間
授業目的	歯・口腔・顎・顔面領域の機能・解剖や疾患について学び、言語聴覚士として必要な知識を身につける。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・一般的な歯科診療について理解する ・口腔・顎・顔面領域の疾患と治療の流れを理解する ・各種形成手術の術式を理解する 				
テキスト・参考図書等	(教) 言語聴覚士のための臨床歯科学・口腔外科学 著名：道 健一 発行：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	歯・口腔の構造	歯の構造・発生・萌出・歯周組織の構造、舌、唾液腺		
	2	歯・歯周組織の疾患と治療	う蝕、歯周炎、保存、補綴、歯科矯正などの治療		
	3	歯・歯周組織の疾患と治療	う蝕、歯周炎、保存、補綴、歯科矯正などの治療		
	4	口腔ケア	口腔ケアの意義と役割		
	5	摂食嚥下障害	口腔機能が関わる摂食嚥下障害解剖、生理		
	6	皮膚・顎・顔面の構造	口腔顎顔面の障害に関わる解剖、生理		
	7	歯性感染、口腔顎顔面の損傷	歯性感染症、口腔軟組織損傷、歯・顎骨の損傷の病態、診断、治療		
	8	歯性感染、口腔顎顔面の損傷	歯性感染症、口腔軟組織損傷、歯・顎骨の損傷の病態、診断、治療		
	9	形成外科	潰瘍、熱傷、放射線障害、褥瘡、肥厚性瘢痕、瘢痕拘縮、植皮と皮弁		
	10	口腔・顎・顔面の先天異常	先天異常の成因、病態		
	11	口唇・口蓋裂	口唇口蓋裂の成因、病態、診断、治療		
	12	口唇・口蓋裂	口唇口蓋裂の成因、病態、診断、治療		
	13	器質性構音障害	顎口腔疾患による構音障害		
	14	口腔・顎・顔面領域の炎症、感染、粘膜疾患、嚢胞、腫瘍、顎関節疾患	各疾患の病態について		
	15	口腔・顎・顔面領域の炎症、感染、粘膜疾患、嚢胞、腫瘍、顎関節疾患	各疾患の病態について		
	16	口腔・顎・顔面領域の炎症、感染、粘膜疾患、嚢胞、腫瘍、顎関節疾患	各疾患の病態について		
	17	口腔・顎・顔面領域の炎症、感染、粘膜疾患、嚢胞、腫瘍、顎関節疾患	各疾患の病態について		
18	口腔・顎・顔面の再建と機能回復	病態、診断、治療 インプラント、顎顔面補綴			

	19	口腔・顎・顔面の再建と機能回復	病態、診断、治療 インプラント、顎顔面補綴
	20	口腔・顎・顔面の再建と機能回復	病態、診断、治療 インプラント、顎顔面補綴

授業科目	失語症 II		担当教員	藪 貴代美	
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	失語症の言語治療は言語・コミュニケーションの問題点の把握から始まる。単に検査を実施するだけでなく、その結果を意味付けすることが重要である。この授業ではコミュニケーション能力、予後予測をするために、原因、発生メカニズムを検討し検査や面接で収集した情報を分析・統合する方法を学ぶ。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 代表的な失語症検査の解釈について学ぶ。 評価サマリーの作成の仕方について学ぶ。 				
テキスト・参考図書等	(教) 失語症 臨床標準テキスト 医歯薬出版 (教) なるほど! 失語症の評価と治療 金原出版株式会社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験と提出物を合わせて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	20			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	復習	失語症の症状		
	2	復習	失語症の検査		
	3	評価・診断の原則	ICF に則った失語症のみかた		
	4	情報収集	初回面接、言語面・関連職種からの情報収集、病歴の取り方、神経学的診察の手法、画像診断、その他の検査		
	5	標準失語症検査 (SLTA) の統合と解釈について	聞く側面		
	6	標準失語症検査 (SLTA) の統合と解釈について	話す側面		
	7	標準失語症検査 (SLTA) の統合と解釈について	読む側面		
	8	標準失語症検査 (SLTA) の統合と解釈について	書く側面		
	9	標準失語症検査 (SLTA) の統合と解釈について	数的処理について		
	10	標準失語症検査 (SLTA) の統合と解釈について	全体を通して		
	11	問題点の抽出	収集した情報、検査結果より問題点を抽出する		
	12	目標設定と訓練計画	将来を見通して目標と達成するステップを考える		
	13	評価サマリーの作成	情報を統合、問題点を抽出してサマリーにまとめる		
	14	評価サマリーの作成	情報を統合、問題点を抽出してサマリーにまとめる。		
15	鑑別診断	関連する障害との鑑別診断について			

授業科目	失語症Ⅲ		担当教員	藪 貴代美	
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	失語症の評価結果に基づいて言語症状を診断し、治療・援助を行なうプロセスと手法を学ぶ。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な訓練プランの立て方を学ぶ。 ・病期別の訓練の考え方を学ぶ。 ・個々の障害に焦点を当てた訓練を考えられる。 ・社会復帰における言語聴覚士の役割を理解する。 				
テキスト・参考図書等	(教) 失語症 臨床標準テキスト 医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	予習・復習にも力を入れて学習すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	言語治療の原則とプロセス	言語治療の枠組み、プロセス、多職種連携、アウトカム、発症後の経過と関わり方の変遷		
	2	言語治療の原則とプロセス	言語治療の枠組み、プロセス、多職種連携、アウトカム、発症後の経過と関わり方の変遷		
	3	言語治療の原則とプロセス	言語治療の枠組み、プロセス、多職種連携、アウトカム、発症後の経過と関わり方の変遷		
	4	言語治療の理論と技法	各種言語治療法の理論と技法について学ぶ		
	5	言語治療の理論と技法	各種言語治療法の理論と技法について学ぶ		
	6	言語治療の理論と技法	各種言語治療法の理論と技法について学ぶ		
	7	言語治療計画の立て方	失語症の回復過程と予後の推定、治療目標の設定 急性期・回復期・維持期別に見た言語治療技法の選択		
	8	言語治療計画の立て方	失語症の回復過程と予後の推定、治療目標の設定 急性期・回復期・維持期別に見た言語治療技法の選択		
	9	言語治療計画の立て方	失語症の回復過程と予後の推定、治療目標の設定 急性期・回復期・維持期別に見た言語治療技法の選択		
	10	社会復帰	社会復帰と社会適応、言語聴覚士の役割		
	11	社会復帰	社会復帰と社会適応、言語聴覚士の役割		
	12	症例検討	症例について		
	13	症例検討	症例について		
	14	症例検討	症例について		
15	小児失語	小児失語症の原因・症状・評価・治療・援助			

授業科目	失語症演習 II	担当教員	松山 大輔		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚療法の対象である失語症について、失語症検査・掘り下げ検査・評価技能を実技的に学ぶ				
到達目標	各種失語症検査を実施できる				
テキスト・参考図書等	特に指定しない				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	60	試験(筆記40:実技20)、提出物から評価する		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	40			
その他	0				
履修上の留意事項	SLTA同様、失語症患者に対する重要な評価となる。 実習に向け、講義時間だけでは習得に十分な時間がとれないので、各自空き時間に積極的に検査練習を行うこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	失語症の評価	WAB失語症検査とは		
	2	失語症の評価	WAB失語症検査の構成、統合と解釈について 検査演習		
	3	失語症の評価	WAB失語症検査の構成、統合と解釈について 検査演習		
	4	失語症の評価	WAB失語症検査の構成、統合と解釈について 検査演習		
	5	失語症の評価	WAB失語症検査の構成、統合と解釈について 検査演習		
	6	失語症の評価	WAB失語症検査の構成、統合と解釈について 検査演習		
	7	失語症の評価	SLTA-ST 標準失語症検査補助テストとは		
	8	失語症の評価	SLTA-ST 標準失語症検査補助テストの構成、統合と 解釈について 検査演習		
	9	失語症の評価	SLTA-ST 標準失語症検査補助テストの構成、統合と 解釈について 検査演習		
	10	失語症の評価	TLPA・重度失語症検査		
	11	失語症の評価	SALA失語症検査		
	12	失語症の評価	SALA失語症検査		
	13	失語症の評価	SALA失語症検査		
	14	失語症の評価	SALA失語症検査		
15	失語症の評価	症例、統合と解釈			

授業科目	小児科学	担当教員	土島 智幸		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	「子どもは小さな大人ではない」。子どものからだの特徴、子ども特有の疾患・病態について学ぶ。また、近年その重要性が増している障害児の問題、障害児に対する医療の提供体制について重点的に学ぶ。				
到達目標	正常発達について学ぶ ・子どもに特有の疾患・病態を正しく理解する ・障害児を取り巻く医療的問題について学ぶ				
テキスト・参考図書等	(教) 言語聴覚士のための基礎知識 小児科学・発達障害学 第3版 著者名：宮尾益知編 発行所：医学書院 (参) 障害児者の摂食・嚥下・呼吸リハビリテーション その基礎と実践 著者名：金子芳洋監修、尾本和彦編 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価する		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	講師の都合により、履修主題の順序が変更になることがある。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	小児の発達・成長、小児保健、小児疾患の診断法	発達・成長を含め、小児のみかたについて学ぶ		
	2	遺伝疾患と先天異常、新生児疾患	新生児を取り巻く問題について学ぶ		
	3	神経・骨・筋肉疾患	神経の異常や、筋力低下を招く疾患について学ぶ		
	4	循環器疾患、呼吸器疾患	心臓と呼吸の疾患について学ぶ		
	5	感染症、消化器疾患	感染症と消化管の疾患について学ぶ		
	6	内分泌・代謝疾患、免疫・アレルギー疾患・膠原病	複数の臓器に影響する疾患について学ぶ		
	7	腎・泌尿器・生殖器疾患、血液疾患・悪性腫瘍	腎臓と子どものがんについて学ぶ		
	8	心身症・神経症、眼科・耳鼻科疾患	こころの問題と周縁領域疾患について学ぶ		
	9	障害児学 1	障害児を取り巻く環境と障害児学、運動機能とその障害について学ぶ		
	10	障害児学 2	知的障害、言語障害、感覚器障害について学ぶ		
	11	障害児学 3	重複障害児、重症心身障害児、障害と認識されにくい「困難」などについて学ぶ		
	12	障害児学 4	発達障害の概念の変遷と診断について学ぶ		
	13	障害児学 5	発達障害の評価とその実施法について学ぶ		
	14	小児在宅医療における多職種連携 1	小児在宅医療における多職種連携について学ぶ		
15	小児在宅医療における多職種連携 2	小児在宅医療における多職種連携について学ぶ			

授業科目	心理測定法	担当教員	阿部 純一		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚士に必要な心理測定技法、尺度構成技法、調査技法、データ処理技法などを学ぶ。				
到達目標	諸技法を習得するとともに、それらの基礎にある、人間の心理や行動を客観的に把握するための基本的姿勢を理解する。				
テキスト・参考図書等	配布資料（数種類）				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70	定期試験と小テストを合わせて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	30			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	心理学とは、人間の心理と行動のメカニズムを解明し、合理的に説明しようとする科学である。そこでは客観的な方法論が必要とされることをよく理解する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	精神物理学（心理物理学）的測定法	閾値の測定、恒常誤差		
	2	精神物理学（心理物理学）的測定法	調整法		
	3	精神物理学（心理物理学）的測定法	極限法		
	4	精神物理学（心理物理学）的測定法	恒常法		
	5	信号検出理論	信号検出理論		
	6	尺度構成法	尺度水準		
	7	尺度構成法	評定法、順位法、一対比較法		
	8	尺度構成法	比率尺度構成法、多次元尺度構成法		
	9	調査法	質問紙法		
	10	調査法	サンプリング		
	11	データ処理技法	データ解析法		
	12	テスト理論	標準化、妥当性、信頼性		
	13	テスト理論	因子分析		
	14	心理測定法の復習とまとめ	復習と模擬テスト		
15	心理測定法の復習とまとめ	復習とまとめ			

授業科目	精神医学		担当教員	鶴飼 渉	
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	10回	時間数 20時間
授業目的	医療人として必要な精神疾患について学ぶ。				
到達目標	精神疾患全般について、その原因・症状・検査法・治療法を理解する。 ①精神医学の方法 ②精神障害の分類 ③精神科症候学 ④精神疾患 ⑤ライフサイクル ⑥精神保健（メンタルヘルス）				
テキスト・参考図書等	（教）精神医学テキスト（改訂第5版） 発行所：南江堂				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	精神医学の方法	精神医学の歴史と概念 異常を判定する基準 精神医学特有の方法（了解、追体験、解釈など）		
	2	精神障害の分類	伝統的 분류（器質性、内因性、外因性） 国際的診断分類（ICD、DSM）		
	3	精神科症候学	精神機能の諸要素（意識、知覚、思考、記憶、言語、感情、意欲、行動、自我意識など）		
	4	精神疾患	1)器質性精神障害 2)精神作用物質関連障害		
	5	精神疾患	3)統合失調症 4)気分障害		
	6	精神疾患	5)神経症性障害		
	7	精神疾患	6)人格障害 7)精神遅滞、発達障害		
	8	精神疾患	8)摂食障害		
	9	精神疾患	9)睡眠障害 10)性障害及び同一性障害		
10	ライフメンタル 精神保健（メンタルヘルス）	各年齢期の障害の特徴、精神障害の予防、産業精神医学、自殺			

授業科目	摂食嚥下障害 II	担当教員	松山 大輔		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	10回	時間数	20時間
授業目的	摂食嚥下障害の評価、診断方法について学び、問題点の抽出、治療計画の立案に結び付ける。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・摂食嚥下障害に関する評価方法を理解する ・スクリーニングの種類と意義を理解し説明できる ・VF、VEの違いを理解する 				
テキスト・参考図書等	(教) 脳卒中の摂食嚥下障害 第3版 著者名：藤島一郎・谷口洋著 発行所：医歯薬出版 (教) 嚥下障害ポケットマニュアル 第4版 著者名：聖隷嚥下チーム 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験の結果から評価する		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	映像や実際の手技を交えながら行います。復習をしっかりとすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	摂食嚥下の検査・診断	診察（問診、検査データの見方） 摂食場面の観察・評価		
	2	摂食嚥下の検査・診断	一般身体所見 脳神経所見		
	3	スクリーニング検査	スクリーニングの意義と種類		
	4	スクリーニング検査	スクリーニング検査 解釈と統合		
	5	嚥下造影検査	嚥下造影(VF) VFの目的 VFの実際		
	6	嚥下内視鏡検査	嚥下内視鏡検査(VE) VEの目的 VEの実際		
	7	その他の検査・評価	SSPT 嚥下圧測定検査 舌圧ほか		
	8	その他の検査・評価	MASA		
	9	栄養学的評価	栄養学的評価・フィジカルアセスメント		
10	摂食嚥下障害の総合評価	総合評価（グレード評価・評価の解釈と問題点の抽出）			

授業科目	摂食嚥下障害Ⅲ		担当教員	北風 祐子	
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	基本的な訓練方法、訓練の実施、記録法、報告書作成を学び、リスク管理を念頭に置いた適切な活動ができる臨床能力を養う。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・疾患や障害の特徴や安全性を考慮し、適切な訓練・指導・支援を選択できる。 ・障害の全体像に基づき、訓練・指導・支援の優先順位を決定できる。 ・摂食・嚥下障害の検査、評価結果から、訓練プログラムを立案できるようになる。 ・嚥下調整食の適応、代替栄養法の適応が説明できるようになる。 				
テキスト・参考図書等	(教) 脳卒中の摂食嚥下障害 第3版 著者名：藤島一郎・谷口洋 著 発行所：医歯薬出版 (参) 摂食嚥下ポケットマニュアル 著者名：藤島一郎(監) 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	摂食嚥下障害Ⅰでの解剖や理論的背景を復習しておくこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	治療・訓練の適応	リハビリテーションアプローチについて		
	2	姿勢と摂食嚥下	摂食嚥下時の姿勢について		
	3	食品調整	嚥下調整食、とろみ剤、嗜好		
	4	具体的な訓練法	治療的アプローチ		
	5	具体的な訓練法	治療的アプローチ		
	6	具体的な訓練法	治療的アプローチ		
	7	具体的な訓練法	代償的アプローチ(代替栄養法)		
	8	具体的な訓練法	環境改善的アプローチ(姿勢と介助)		
	9	具体的な訓練法	頭頸部腫瘍に対するアプローチ		
	10	チームアプローチ	嚥下チーム・NST・呼吸ケアチーム・WOC		
	11	目標設定	予後因子、ゴールと訓練の説明、家族指導		
	12	内科的治療と外科的治療	薬物療法、機能改善術、誤嚥防止術		
	13	気管切開のある患者への対処	カニューレの種類と特徴		
	14	リスクマネジメントについて	窒息・誤嚥への対応		
15	摂食嚥下障害における倫理の問題	臨床倫理、経口摂取と肺炎の問題			

授業科目	摂食嚥下障害演習Ⅰ	担当教員	山下 奉位		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	摂食・嚥下に関する検査練習、結果解析を行う。検査結果と総合的な情報収集から、適切な目標設定、治療プログラムを立案する知識を身につける。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・スクリーニングテストの手順を理解し実施できる ・各種検査の意味を理解し解析、統合できる ・得た情報と検査結果を総合して嚥下の評価ができる。 				
テキスト・参考図書等	(教) 脳卒中の摂食嚥下障害 第3版 著者名：藤島一郎・谷口洋著 発行所：医歯薬出版 (教) 嚥下障害ポケットマニュアル 第4版 著者名：聖隷嚥下チーム 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	・定期試験 80% ・小テスト 20%		
	レポート	0			
	小テスト	20			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	実践的な授業です。臨床に生かせるように積極的に参加すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	嚥下評価の概要	嚥下評価の意義と目的		
	2	スクリーニングテスト	反復唾液飲みテスト (RSST)について・改定水飲み検査 (MWST)について		
	3	スクリーニングテスト	RSST、MWST の練習		
	4	食事姿勢の概念	姿勢評価・食事するための姿勢調整		
	5	スクリーニングテスト	フードテスト (FT)について		
	6	統合と解釈	フィジカルアセスメント		
	7	統合と解釈	栄養学的評価		
	8	統合と解釈	RSST、MWST の意味すること		
	9	統合と解釈	RSST と MWST、FT の関連		
	10	統合と解釈	VF、VE の見方 (1)		
	11	統合と解釈	VF、VE の見方 (2)		
	12	統合と解釈	症例で結果の解釈と問題点の抽出		
	13	治療プログラム	治療方法		
	14	口腔ケア	口腔ケアの意義・口腔評価		
15	介助者への指導	食事介助方法、適切な食形態、トロミ実習			

授業科目	聴覚検査法Ⅱ	担当教員	岡崎 聡子		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚士が実施する代表的な検査の、目的・手順を学び、結果の分析を通して、聴覚障害の有無、タイプとの関係などの理解を深める。聴覚機能の鑑別診断に必要な評価法（自覚的、他覚的、乳幼児）を習得する。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・各種内耳機能検査の手順を理解し実施できる。 ・鑑別診断について学び必要な検査を知る ・平衡機能検査について学ぶ。 				
テキスト・参考図書等	(教) 聴覚検査の実際 第4版 南山堂				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70	・定期試験と授業内での提出物にて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	30			
その他	0				
履修上の留意事項	検査の理論を理解し、怪我がないように安全に配慮すること				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	純音聴力検査	純音聴力検査の復習		
	2	機能性難聴の検査	機能性難聴の鑑別診断に必要な検査		
	3	内耳機能検査	自記オージオメトリの臨床的意義と手順		
	4	内耳機能検査	自記オージオメトリ		
	5	補聴器装用に必要な検査	補聴器処方、装用効果測定に必要な検査		
	6	内耳機能検査	不快閾値		
	7	内耳機能検査	閾値上聴力検査の臨床的意義と手順		
	8	内耳機能検査	閾値上聴力検査の臨床的意義と手順		
	9	内耳機能検査	語音聴力検査の臨床的意義と手順		
	10	内耳機能検査	語音聴力検査		
	11	内耳機能検査	語音明瞭度検査		
	12	乳幼児聴力検査	聴性行動反応検査 (BOA)、条件詮索反応検査 (COR)、遊戯聴力検査 (play audiometry)		
	13	他覚的検査	聴性脳幹反応 (ABR)、聴性定常反応 (ASSR)		
	14	他覚的検査	耳音響放射 (OAE)		
15	平衡機能検査	めまいの機序、電気眼振図			

授業科目	聴覚障害Ⅱ	担当教員	岡崎 聡子		
対象年次・学期	2年・通年	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	20回	時間数	40時間
授業目的	こどもの発達と聴覚障害の関連性について理解する。 発達段階に応じた評価、ハビリテーションの基礎知識と技法、援助について学ぶ。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚の正常発達について理解する ・検査、訓練について小児特有の工夫について考える ・養育者へのかかわりについて学ぶ 				
テキスト・参考図書等	(教) 標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版 医学書院				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	・定期試験およびグループワーク等の授業への参加態度にて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	20			
履修上の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・欠席しないこと ・グループワークの際は、メンバーの一員として積極的に参加すること 				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	小児難聴のハビリテーションの概要	難聴児のハビリテーションの目的と考え方、養育者への指導		
	2	小児期の発達と難聴の影響	聴覚機能の発達、聴覚障害の影響		
	3	小児難聴の原因と病態①	遺伝性難聴・胎生期性難聴・周産期性難聴・後天性難聴など		
	4	小児難聴の原因と病態②	遺伝性難聴・胎生期性難聴・周産期性難聴・後天性難聴など		
	5	小児難聴の評価①	関連情報の収集、小児聴覚検査		
	6	小児難聴の評価②	関連情報の収集、小児聴覚検査		
	7	小児難聴の評価③	コミュニケーション発達検査、言語評価		
	8	小児難聴の評価④	コミュニケーション発達検査、言語評価		
	9	小児難聴の評価⑤	前半のまとめ		
	10	まとめ①	前半のまとめ		
	11	小児難聴の指導・支援①	ハビリテーションプログラムの立案、コミュニケーションモード		
	12	小児難聴の指導・支援②	乳幼児・幼児期		
	13	小児難聴の指導・支援③	乳幼児・幼児期		
	14	小児難聴の指導・支援④	学童期・成人期		
	15	小児難聴の指導・支援⑤	学童期・成人期		
	16	小児難聴の指導・支援⑥	各発達段階の学習方法		
	17	障害認識へのアプローチ	発達段階ごとの特徴と指導、環境調整		
	18	軽度・中等度難聴児の課題	聴覚補償、言語発達		
	19	学校教育における指導と課題	歴史、指導体制		
20	まとめ②	後半まとめ			

授業科目	聴覚心理学	担当教員	阿部 純一		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	人間の“聴こえ”のメカニズムを学ぶ。また、聴覚特性を理解する。				
到達目標	聴こえに対応する音の物理的特徴を知る。人間の聴覚特性を知る。				
テキスト・参考図書等	配布資料 および 参考図書： 言語聴覚士のための音響学 著者名：今泉敏 発行所：医歯薬出版 参考図書： 言語聴覚士の音響学入門 著者名：吉田友敬 発行所：海文堂出版 参考図書： ゼロからはじめる音響学 著者：青木直史 発行所：講談社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70	定期試験と小テストを合わせて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	30			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	物理的な音響があるから聞こえるのではない。聞く・聞こえるという人間の内的メカニズムがあるから聞こえる。そのメカニズムを理解する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	音と聴覚システム（聴覚系）	音の物理学的記述		
	2	音と聴覚システム（聴覚系）	聴覚系の構造		
	3	音と聴覚システム（聴覚系）	聴覚神経系の反応		
	4	音の心理物理学	音の物理的特徴とそれに対応する心理的属性		
	5	音の心理物理学	音の大きさ（ラウドネス）		
	6	音の心理物理学	音の高さ（ピッチ）		
	7	音の心理物理学	音色、音の時間的特徴とその感覚・知覚		
	8	聴覚の周波数特性	絶対閾・感覚閾		
	9	聴覚の周波数特性	弁別閾		
	10	聴覚の周波数特性	可聴範囲		
	11	聴覚の周波数特性	周波数特性、絶対判断と相対判断		
	12	マスキング現象	臨界帯域、聴覚フィルター		
	13	マスキング現象	同時マスキング、継時マスキング、中枢性マスキング		
	14	両耳聴	両耳の心理的効果、空間感覚、音源定位、カクテルパーティー効果		
15	環境と聴覚	聴覚順応、聴覚疲労、環境騒音			

授業科目	内科学		担当教員	鬼原 彰	
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	各臓器系統別に疾患の成り立ちと診断・治療上の要点を学ぶことを目的とする				
到達目標	人間の基本的構造とその機能をコントロールする3つのシステムである神経系、内分泌系、免疫系がどのようにして細胞レベル、組織レベル、個体レベルの機能維持とかかわりを有しているかを学び、それをリハビリテーションに応用する。リハビリテーションにおいても分化と統合の時代となっている。				
テキスト・参考図書等	(教)・言語聴覚士テキスト 第3版 発行所：医歯薬出版 ・内科学 第4版 (標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野) 発行所：医学書院				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	人体の機能と疾患をよく理解することは、言語聴覚士にとって重要です				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	生体学総論	総論		
	2	動物としての骨・関節・筋疾患	骨・関節・筋の機能と疾患の診断と治療		
	3	神経(ニューロン)による細胞性コントロール	脳・神経系機能と疾患の診断・治療		
	4	内分泌(ホルモン)による液性コントロール	内分泌の機能と疾患の診断・治療		
	5	免疫(細胞性・液性)によるコントロール	免疫の機能とアレルギー・膠原病の診断・治療(白血球)		
	6	消化器系疾患	消化器(消化管・肝・胆・膵)の機能と疾患の診断・治療		
	7	消化器系疾患	消化器(消化管・肝・胆・膵)の機能と疾患の診断・治療		
	8	消化器系疾患	消化器(消化管・肝・胆・膵)の機能と疾患の診断・治療		
	9	代謝系疾患	代謝疾患の診断・治療		
	10	代謝系疾患	代謝疾患の診断・治療		
	11	循環器系疾患	循環器(呼吸器・心血管・腎)の機能と疾患の診断・治療		
	12	循環器系疾患	循環器(呼吸器・心血管・腎)の機能と疾患の診断・治療		
	13	循環器系疾患	循環器(呼吸器・心血管・腎)の機能と疾患の診断・治療		
	14	血液造血器疾患	血液の機能と疾患の診断・治療(赤血球、血小板)		
	15	血液造血器疾患	血液の機能と疾患の診断・治療(赤血球、血小板)		
16					

授業科目	認知心理学	担当教員	菊谷 敬子		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚士国家試験の出題範囲である認知心理学についての理解を深め、知識を身につける。				
到達目標	認知心理学の研究手法やメカニズムを学ぶことで、心理学における認知心理学の位置づけや認知の働きを理解する。主に、記憶、思考、言語などの認知機能の特徴とメカニズムについて学ぶ。				
テキスト・参考図書等	テキスト：『言語聴覚士のための心理学 第2版』 著者名：山田弘幸(編) 発行所：医歯薬出版 参考図書：『マイヤーズ心理学』 著者名：D. マイヤーズ 発行所：西村書店 配布資料：授業ごとに配布予定				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験の結果で評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	テキストと配布資料をもとに以下のスケジュールで授業を進めが、全体の進行状態に応じてスケジュール等を変更する場合もある。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	認知心理学とは	授業のガイダンスと心理学の中における認知心理学の位置づけ		
	2	記憶	記憶の仕組み・種類		
	3	記憶	記憶の処理・モデル		
	4	記憶	記憶の忘却		
	5	記憶	記憶の構成の誤り		
	6	思考	思考のしくみ、問題解決		
	7	思考	概念		
	8	思考	スキーマ理論		
	9	思考	メタ認知能力について		
	10	推論	演繹推論・帰納推論		
	11	言語	言語と思考		
	12	言語	言語的コミュニケーション・非言語的コミュニケーション		
	13	認知と感情	認知と感情の関係		
	14	対人認知	対人認知・顔の認知		
15	全体のまとめ	まとめと復習			

授業科目	非流暢性障害		担当教員	小屋 雄二	
対象年次・学期	2年 ・ 後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	①吃音症状（中核症状と二次的症状）と進展段階における特徴と心理的状況を理解する。 ②吃音の評価法（吃音検査法）を理解する。 ③幼児期、学童期、成人期の指導・訓練法の概要を理解する。				
到達目標	①吃音の症状や基本的事項を学習し、基本的な知識を習得する。 ②評価法（吃音検査法）を習得する。 ③幼児期から成人期までの各年代での指導・訓練の概要を習得する。				
テキスト・参考図書等	(教)「言語聴覚士テキスト第3版」 著者名：大森孝一、深浦順一編集 発行所：医歯薬出版 (教)「言語聴覚士ドリルプラス 吃音・流暢性障害」 著者名：土屋美智子、大塚裕一編集 発行所：診断と治療社 (参)「エビデンスに基づいた吃音支援」 著者名：菊池良和 発行所：学苑社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	85	定期試験・レポート・その他を合わせて評価を行う。		
	レポート	5			
	小テスト	0			
	提出物	5			
その他	5				
履修上の留意事項	他者を気にせず、質問を通してより授業が深化する方向で授業に臨むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	吃音の基礎	定義、発生率、ある女子学生の体験記		
	2	「サンデー九」	「サンデー九」北海道言友会 (DVD)		
	3	吃音の進展	吃音症状（中核症状、二次的症状）、進展段階、CALMSモデル		
	4	吃音の原因仮説	歴史的な背景も含めて概観する		
	5	吃音の鑑別診断	獲得性吃音（症候性、心因性）、クラタリング		
	6	吃音症状分析	吃音症状分析演習		
	7	吃音検査法(1)	一貫性効果、適応性効果、吃音検査法第2版演習(1)		
	8	吃音検査法(2)	吃音重症度検査、吃音検査法第2版演習(2)		
	9	吃音検査法(3)	コミュニケーション態度調査票、吃音検査法第2版演習(3)		
	10	保護者支援	保護者と子どもへの支援		
	11	社交不安障害	社交不安障害、ペーシングボードの作製		
	12	指導・訓練法(1)	楽な発話モデル、環境調整法、リッカムプログラム		
	13	指導・訓練法(2)	流暢性形成法、吃音緩和法、統合的アプローチ		
	14	指導・訓練法(3)	メンタルリハーサル法、認知行動療法		
	15	自助グループ	言友会の活動、吃音者宣言、詩のボクシング (DVD)		
16					

授業科目	保健体育 II		担当教員	大楽 敏夫	
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	自分の健康と人々の健康のあり方について学ぶ。スポーツをとおしてその意義と重要性を知るとともに、人とのコミュニケーション能力を養う。				
到達目標	感染症対策の必要性和命を守るための応急手当や救命処置について学ぶ。また私たちの健康を支えている保健・医療のしくみやその活用を理解する。スポーツをとおして心身の健康を維持・向上させるとともに、他者を思いやる心を養う。				
テキスト・参考図書等	大修館現代高等保健体育				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	・定期試験 50% - 解答率の評価 ・平常点 20% (レポート-内容・丁寧さ、小テスト-解答率の評価 (学習のまとめで実施)、提出物-期日日厳守) ・体育実技 30%-取り組み・姿勢・協調性など総合的に判断		
	レポート	20			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	30				
履修上の留意事項	保健の講義は教室で行う。体育は北海道スポーツ専門学校の体育館を利用する。服装は運動に適した服装で参加する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	現代の感染症と予防	コロナウイルスをはじめとする感染症の昔と現在の現状とその予防について		
	2	応急手当の意義	応急手当の意義とその手順について		
	3	心肺蘇生法の意義	心肺蘇生法の意義と原理およびその手順について		
	4	日常的 j な応急手当	けがの応急手当と熱中症の応急手当について		
	5	保健制度とその活用	保健行政の役割と健康づくりおよび保健サービスの活用について		
	6	医療制度とその活用	医療制度と医療保険のしくみ、医療機関と医療サービスについて		
	7	医薬品と健康	医薬品の種類と使い方および医薬品の安全性のための対策について		
	8	スポーツの実践 (1)	準備運動・基礎運動 (縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他 (練習及び試合)		
	9	スポーツの実践 (2)	準備運動・基礎運動 (縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他 (練習及び試合)		
	10	スポーツの実践 (3)	準備運動・基礎運動 (縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他 (練習及び試合)		
	11	スポーツの実践 (4)	準備運動・基礎運動 (縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他 (練習及び試合)		
	12	スポーツの実践 (5)	準備運動・基礎運動 (縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他 (練習及び試合)		
	13	スポーツの実践 (6)	準備運動・基礎運動 (縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他 (練習及び試合)		
	14	スポーツの実践 (7)	準備運動・基礎運動 (縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他 (練習及び試合)		
15	スポーツの実践 (8)	準備運動・基礎運動 (縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他 (練習及び試合)			

授業科目	臨床心理学	担当教員	風間 雅江		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	20回	時間数	40時間
授業目的	臨床心理学の基本理論、および心理臨床の実践的アプローチについての専門的知識を習得することを目的とする。				
到達目標	代表的理論モデル、人格理論、心理アセスメント、異常心理学、ライフサイクルの各段階における心理的問題、心理療法の諸技法等について理解することを目標とする。心理検査については、実践を通して体験的に理解する。				
テキスト・参考図書等	(教) よくわかる臨床心理学 改訂新版 著者名：下山晴彦 (編) 発行：ミネルヴァ書房				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	60	定期試験、レポート、平常時の提出課題を合わせて評価する。		
	レポート	20			
	小テスト	0			
	提出物	20			
	その他	0			
履修上の留意事項	医療専門職に求められる人間理解と心理的支援のあり方について、講義での学びを通して、改めて問い直し洞察を深めるように意識してください。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	臨床心理学とは何か	臨床心理学の構造、臨床心理学の歴史、理論と実践の関係、他		
	2	基本理論	ナラティブ・アプローチ、エビデンスベースト・アプローチ、生物-心理-社会モデル、他		
	3	人格理論	類型論、特性論、性格検査体験、他		
	4	心理アセスメント	アセスメントの目的、面接法、観察法、質問紙法、投影法、他		
	5	異常心理学	さまざまな精神障害および精神症状の理解と支援、他		
	6	乳幼児期と心理的課題	生涯発達の視点、乳幼児期の特徴、さまざまな発達理論、発達検査、乳幼児期の心理的課題と心理的支援、他		
	7	児童期と心理的課題	児童期の特徴、発達障害、児童期の心理的問題と心理的支援、他		
	8	思春期・青年期と心理的課題	思春期の定義、青年期の位置づけ、思春期・青年期の特徴、アイデンティティの確立、思春期・青年期の心理的問題と心理的支援、他		
	9	中年期と心理的課題	中年期の特徴、転換期に潜む危機、中年期の身体的・心理的・社会的変化、中年期の心理的課題と心理的支援、他		
	10	高齢期と心理的課題	高齢期の特徴、老年的超越、高齢期の心理的課題と心理的支援、他		
	11	クライアント中心療法	クライアント中心療法の歴史、ロジャーズの理論と展開、他		
	12	認知行動療法	行動療法、認知療法、認知行動療法の理論と展開、他		
	13	マインドフルネスを用いた心理療法	マインドフルネスの概念、マインドフルネスに基づく心理支援の理論と展開、マインドフルネス体験、他		
	14	日本で生まれた心理療法	森田療法、内観療法、臨床動作法のそれぞれの理論と展開、他		
	15	精神分析、分析心理学	フロイトの精神分析理論、防衛機制、ユングの分析心理学の理論と展開、他		
	16	演習	臨床心理学関連演習		
	17	演習	臨床心理学関連演習		
	18	演習	臨床心理学関連演習		
19	演習	臨床心理学関連演習			

	20	演習	臨床心理学関連演習
--	----	----	-----------

授業科目	臨床神経学	担当教員	中村 仁志夫		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	障害克服の戦略（リハビリテーション計画）を作成するうえで欠かすことができない神経系の基本的な構造と働きについて説明し、その上で主要な障害（疾患）のおこり方を理解してもらうことで、医療専門職としての基本的認識を獲得させる。				
到達目標	神経系の成り立ちと働きおよび代表的疾患（病態）について学習し、体系的知識を獲得して専門職としての臨床的応用に備えることを目標とする。				
テキスト・参考図書等	(教)「病気が見える」第7巻 脳・神経系」第2版 著者名：尾上尚志ら 発行所：メディック・メディア (参)「医療系学生のための病理学」第5版 著者名：中村仁志夫ら 発行所：講談社 「日本人の脳」 著者名：角田忠信 発行所：大修館書店				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70	筆記試験（70点満点）と提出物（30点満点）とを合わせた総合点（100点満点）評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	30			
その他	0				
履修上の留意事項	1)ノート作成に血道をあげ過ぎることなく、教科書等には書き込みや文献引用の付箋貼付をする方が効率的である。索引活用に習熟することも重要である。 2)解剖学・生理学の知識は絶えず復習すること。 3)おっくうがらずに辞典・辞書を引くこと。 4)日常的に新聞や雑誌の医療関係の記事をよく読むこと。できれば切り抜き帳を作ると知識の積み重ねが得られるであろう。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	神経系の解剖と生理（1）	神経細胞の特殊性、脳機能の局在、高次脳機能の配置、優位半球と劣位半球、脳血管の解剖、髄液循環、血液脳関門、グリアの役割		
	2	神経系の解剖と生理（2）	運動系：錐体路と錐体外路 感覚系：表在感覚と深部感覚 自律神経系：交感神経と副交感神経		
	3	神経症候学（1）麻痺の呼び方、失語症、意識障害	麻痺の種類、運動性失語と感覚性失語、意識障害の分類、脳死と植物状態		
	4	神経症候学（2）神経学的検査法の意義と関連する病態	画像検査（CT,MRI）、脳波とてんかん、髄液検査、不随意運動、自律神経系		
	5	認知症	アルツハイマー型、脳血管性、レビー小体型、前頭・側頭型、脳血管性、正常脳圧水頭症		
	6	脳血管障害、頭部外傷	脳卒中（脳梗塞、脳出血、くも膜下出血）、脳挫傷、脳震盪、硬膜外血腫、硬膜下血腫		
	7	神経系の感染症	髄膜炎と脳炎、細菌性感染症、単純ヘルペス脳炎、带状疱疹、日和見感染と潜伏感染		
	8	脱髄疾患、先天代謝異常	多発性硬化症、ADEM、副腎白質ジストロフィー、ハーラー病など		
	9	系統変性疾患（1）錐体路系と錐体外路系	運動ニューロン病（ALSなど）、パーキンソン病とパーキンソン症候群		
	10	系統変性疾患（2）脊髄小脳系とミトコンドリア脳筋症	脊髄小脳変性症、多系統萎縮症（シャイ・ドレージャー病など）、ハンチントン病、ポリグルタミン病、MELAS、MERRF		
	11	脳腫瘍、腫瘍性疾患	グリオーマと非グリオーマ、髄膜腫、下垂体線種、シュワン細胞腫、松果体腫瘍、母斑症（フォン・レックリングハウゼン病など）		
	12	神経筋疾患	筋ジストロフィー症（デュシェンヌ型など）、重症筋無力症、多発性筋炎、皮膚筋炎		
13	末梢神経障害、栄養障害性疾患	糖尿病性ニューロパチー、がん性ニューロパチー、ギラン・バレー症候群、ウェルニッケ脳症（ビタミンB1欠乏）、脊髄連合変性症（ビタミンB12欠乏）			

	14	中毒性疾患	水俣病、SMON、一酸化炭素中毒、砒素中毒、薬物中毒、アルコール中毒など、依存症の問題点
	15	脳死と心臓死、プリオン病	脳死と植物人間の違い（再認識）、クロイツフェルト・ヤコブ病（プリオン病）
	16		

授業科目	臨床実習 II	担当教員	松山 大輔		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	80回	時間数	160時間
授業目的	学内での知識技術の習得、および臨床実習 I において学んだことを活用し、症例を通じて情報収集、評価・記録、目標設定までの過程を学ぶ。				
到達目標	対象者とのレポートを形成し、評価を通して、対象者の問題点を抽出し、障害像を把握、適切な目標設定ができる。 臨床教育者の指導の下、適切なデイリー、評価報告書の作成ができる。				
テキスト・参考図書等	特に指定しない。				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験		臨床教育者の評価と学科教員の評価を合わせて総合的に評価する。 評価項目(実習施設) 1、医療者としての資質・適性 2、信頼関係の形成 3、適切な評価の選択と実施、分析 4、訓練計画の立案 評価項目(学校) 1、実習前準備 2、提出物 3、実習後の発表 実習施設 60%、学校 40% 200点満点中 120点以上を合格とする。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物				
その他	100				
履修上の留意事項	患者を第一に考え、実習指導者を通して自らの課題が解決できるように積極的に実習に臨むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1		1 症状を把握し、習得した知識や技術と照合し検討することができる。 2 言語聴覚療法において必要な検査を選択し、評価を実施することができる。 3 評価の結果から問題点を抽出して目標設定、プログラム立案を行い、適切な評価報告書を作成することができる。 4 実習報告会を実施し、内容を伝達することができる。		

授業科目	リハビリテーション医学	担当教員	本間 俊一		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	治療医学とは視点の異なるリハビリテーション医学の考え方、診断、治療などを学ぶ。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ ICF に基づいたリハビリテーションの考え方を理解する ・ 機能障害の評価方法について知る ・ 疾患ごとのリハビリテーションの考え方、チームアプローチについて理解する 				
テキスト・参考図書等	(教) わかりやすいリハビリテーション 著者名：岡島康友 発行所：中山書店				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	リハビリテーション概論	理念・対象と方法、ICF 分類		
	2	リハビリテーションのための基礎知識	運動の解剖学、神経生理学、代謝生理学		
	3	機能障害の評価①	運動障害と歩行		
	4	機能障害の評価②	関節可動域、体性感覚と疼痛		
	5	機能障害の評価③	高次脳機能障害、意識障害、呼吸と循環、排せつ、成長と発達		
	6	日常生活動作 (ADL) ①	ADL の概念、評価		
	7	日常生活動作 (ADL) ②	ADL の予後診断、介助の実際		
	8	リハビリテーション治療①	物療、運動療法		
	9	リハビリテーション治療②	作業療法		
	10	リハビリテーション治療③	義肢・補装具、工学的アプローチ		
	11	リハビリテーション治療④	チームアプローチ、在宅リハ		
	12	主な疾患のリハビリテーション①	脳損傷、神経・筋疾患、末梢神経障害		
	13	主な疾患のリハビリテーション②	脊損、切断、骨・関節疾患、小児 (CP、筋ジス、二分脊椎)		
	14	主な疾患のリハビリテーション③	呼吸器疾患、循環器疾患		
15	主な疾患のリハビリテーション④	自己免疫・膠原病、がんのリハビリテーション			

授業科目	英語Ⅲ	担当教員	板東 眞一		
対象年次・学期	2年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	英語Ⅲでは、将来の医療現場で役に立つ基本的なコミュニケーション能力を育成することを目的とする。				
到達目標	①平易な英語で話したり書いたりできる。②日常生活に関する平易な英文を読んだり聞いたりできる。③医療に関する基本的な専門用語を理解できる。				
テキスト・参考図書等	(教) GET BY IN ENGLISH 1 Starter (コミュニケーションのための実践英語1 [入門編]) 著者 Julyan Nutt / Michael Marshall / 倉橋洋子 / 宮田学 発行所 三修社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	①試験は学習内容の理解度を評価する。 ②提出物は学習内容に即したライティングの到達度を評価する。 ③その他は授業中のタスク(コミュニケーション活動)の到達度を評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	15			
その他	35				
履修上の留意事項	医療の専門職を目指すものとして、真摯で意欲的な学習を期待する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	Warm-up Unit Welcome to English Class!	1,Classroom language 2.Practice patterns		
	2	Unit 1 May I ask your name?	Part A		
	3	Unit 1 May I ask your name?	Part B		
	4	Unit 2 What does your sister do?	Part A		
	5	Unit 2 What does your sister do?	Part B		
	6	Unit 3 How often do you eat out?	Part A		
	7	Unit 3 How often do you eat out?	Part B		
	8	Review 1	Interview test		
	9	Unit 4 What do you like to do?	Part A		
	10	Unit 4 What do you like to do?	Part B		
	11	Unit 5 Is there a convenience store near here?	Part A		
	12	Unit 5 Is there a convenience store near here?	Part B		
	13	Unit 6 Are there any class rules?	Part A		
	14	Unit 6 Are there any class rules?	Part B		
15	Review 2, 学習のまとめ	Interview test, 振り返り			

授業科目	英語Ⅳ	担当教員	板東 眞一		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	英語Ⅳでは、将来の医療現場で役に立つ基本的なコミュニケーション能力を育成することを目的とする。				
到達目標	①平易な英語で話したり書いたりできる。②日常生活に関する平易な英文を読んだり聞いたりできる。③医療に関する基本的な専門用語を理解できる。				
テキスト・参考図書等	(教) GET BY IN ENGLISH 2 Elementary (コミュニケーションのための実践英語2 [初級編]) 著者 Julyan Nutt / Michael Marshall / 倉橋洋子 / 宮田学 発行所 三修社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	①試験は学習内容の理解度を評価する。 ②提出物は学習内容に即したライティングの到達度を評価する。 ③その他は授業中のタスク(コミュニケーション活動)の到達度を評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	15			
その他	35				
履修上の留意事項	医療の専門職を目指すものとして、真摯で意欲的な学習を期待する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	Unit 1 What did you do last night?	Part A: Talking about Weekends 医療関係の職業		
	2	Unit 1 What did you do last night?	Part B: My Life Story 身体(外側)		
	3	Unit 2 What's the weather like?	Part A: On the Telephone 身体(骨、筋肉)		
	4	Unit 2 What's the weather like?	Part B: My Favorite Season 身体(内臓)		
	5	Unit 3 Do you have any plans for New Year?	Part A: Plans for the Weekend 病院の科の名称		
	6	Unit 3 Do you have any plans for New Year?	Part B: My Vacation Plans 病院関係		
	7	Review 1	Interview test 症状(痛みなど)		
	8	Unit 4 What does he look like?	Part A: He looks like... 病気(1)		
	9	Unit 4 What does he look like?	Part B: This Is My Family 病気(2)		
	10	Unit 5 What's it like?	Part A: His Lost Bag 病気(3)		
	11	Unit 5 What's it like?	Part B: My Watch 病気(4)		
	12	Unit 6 How was your trip?	Part A: Her Recent Trip 治療・手術		
	13	Unit 6 How was your trip?	Part B: My Homestay Trip to London 薬剤関係		
	14	Review 2	Interview test 医療関係の道具		
15	学習のまとめ	振り返り			

授業科目	言語聴覚障害学概論II	担当教員	松山 大輔		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	①リハビリテーションにおけるチームアプローチの重要性を理解する。②臨床実習、国家試験に向けた準備をする。				
到達目標	①病院等の組織ならびにリハビリテーションチームの一員としての運営・管理を学ぶ。②国試問題、臨床実習への取り組み方を学ぶ。				
テキスト・参考図書等	特に指定しない				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	提出物(模試問題・グループワークによって作成された解説等)で評価を行う		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	100			
その他	0				
履修上の留意事項	国家試験および臨床実習に向けた重要な科目のため、意欲をもって参加すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	チームアプローチとは	PT・OT・MSW・Nrs		
	2	情報管理	個人情報保護法について		
	3	診療報酬等	医療報酬、介護報酬、指示箋とリハ記録		
	4	リスクマネジメント	片麻痺患者のADLについて 移乗、トランスファーなど吸引(PT)		
	5	リスクマネジメント	片麻痺患者のADLについて 移乗、トランスファーなど吸引(PT)		
	6	バイタルサインとは	バイタルサインの意義を学ぶ。測定方法(血圧、脈拍、呼吸)(Ns、EMT)		
	7	バイタルサインとは	バイタルサインの意義を学ぶ。測定方法(血圧、脈拍、呼吸)(Ns、EMT)		
	8	国家試験対策	模試問題実施		
	9	国家試験対策	グループワークにて解説を作成し発表する		
	10	国家試験対策	模試問題実施		
	11	国家試験対策	グループワークにて解説を作成し発表する		
	12	臨床実習準備	<ul style="list-style-type: none"> ・評価とは ・目の前の患者から何を観察したらよいのか、着眼点を学ぶ ・デイリー・レポートとは ・患者を評価し、結果・考察を文章にする技術を学ぶ 		
	13	臨床実習準備	実習の手引きの説明		
	14	臨床実習	臨床実習報告会		
15	臨床実習	臨床実習報告会			

